

## 秋山真之

秋山真之については、テレビで放映されていることもあるし、司馬遼太郎さんの小説「坂の上の雲」の主人公のひとりだから知らない人はほとんどいないと思うが、近頃の若い人は本を読まない、とよく言われる。新聞記者でさえ、同じである。坂の上の雲を読んでいない人の為にまとめておくと、明治元年伊予松山の役人の子に生まれ、当初は大学予備門に所属したが、(念のため、この大学とは東大のことで、明治時代、大学といえば東京大学のことである。)兄の秋山好古が陸軍に在籍していたことから、紆余曲折があつて海軍軍人になることを決めた。同期で親友だった正岡子規にこれを報告するときは辛かつたらしい。

海軍兵学校を卒業後、米国に大使館付き武官として留学し古今の文献を読み漁り、米国とスペインとの戦争の観戦武官になり、湾口閉塞も実際に見た。(日露戦争の、旅順港閉鎖作戦の予行のようなもの。)ある上官が、「君は海軍大学にいかないのかね」と尋ねたとき、不思議そうな顔をして「わたしに教える教官がいるのでしょうか？」と返答した。「これは教官だ！」と上官も納得した。

帰国後、日露戦争に際し、参謀長が島村速雄、前任参謀もいたのだが、緒戦でいくつかのミスがあり、ここが秋山の恵まれたところなのだが、島村の長者のような人格と前任参謀の病気などで、37歳の秋山真之にすべての作戦が任せられた。つまり日本海軍の作戦をすべて自分が考えねばならなくなった。そのため、米国留学の際、マハンに教わったとおり、あらゆる陸戦・海戦を整理統合し、自分なりの戦法を編み出すことをおこなった。瀬戸内海の水軍(いわば海賊)の戦法まで研究しつくした。東郷平八郎が戦争開始にあたり発した「皇国の興廃この一戦にあり。云々」を実践する立場になった。敵のバルチック艦隊がどこからやってくるか、に脳髓を絞り切つて、覚醒しているような眠っているような、なかば夢うつつの状況にまで追い込まれ、(関英男さんのいう幽子情報仮説。このあたりのことについては、ノストラダムスの大予言 2 参照)このとき対馬海峡を縦列になって進んでくるバルチック艦隊が「見えた」。このときに考案した作戦が、丁字作戦と有名な七段構えの戦法であるといわれるが、丁字作戦は日清戦争のときにすでに実験されている。・・・結局七段構えの三段目までに完勝した。実質1日半で勝負は決した。そして「連合艦隊解散の辞」を書いたのだが、ルーズベルト大統領が即刻これを翻訳させて、全軍に配布した。それほどの内容を伴った名文である。・・・この頃が秋山真之の絶頂期であり、戦後は、すべての軍人がそうであるように「無用の長物」になってしまったわけである。坂の上の雲ではこの辺りまでしか描写していないが、それはそれで当然のことではある。真之は戦後「常軌を逸した世界には行っていった」とか「息子には軍人にならせず、僧侶にならせた」程度のことを書いているのみである。

智謀湧くが如し、とか触れなば切らん、といった剃刀のような人物で、見るからに一流の人間であることがわかるタイプの人だったらしい。

別の視点がある。明治の易聖・呑象高島嘉右衛門が伊藤博文に語った言葉が残っている。「東郷中将の重厚さ、秋山少佐の鋭敏さ、みごとな組み合わせと言えますな。いまの帝国海軍でこれ以上の人事は考えられますまい。

秋山さんはたしかに稀に見る天才です。しかし天才というものは、狂人と紙一重というような性格を持っています。私は一度しか会ったことはありませんが、そのことははっきりと見とどけました。おそらく秋山さんは晩年道をあやまるでしょう。しかし、それは日本の将来には何の関係もありません。いまはその天才を十分に発揮させるべきでしょう。」

事実、大正5年、少将のときに舞鶴港に艦隊を引率してきたとき大本教を訪れ、その教義に心酔し、しばらくは問題がなかった。当然ながら、部下を先に潜入させて、いわゆる索敵情報は入手している。秋山側の主張では、おりから患った盲腸炎（虫垂炎）の手術後医が処方した薬を服まずに大本の手かざしやおひねりを呑むことで治った、と考えていたとある。たしかに、大本では初期の頃には病氣治しを宣教の一手段としていたことがあるが、出口王仁三郎は、はっきりと「病氣は医者が治すものだ」と述べているから、どうも納得できないところがあるのだが、秋山は夫人の「血の道」の治療に大本の鎮魂帰神に頼っている。

秋山が、大本にいたのは、ひとつには出口王仁三郎と意気投合し、あるいは出口なおが「神様の御用をする」と杓島に籠もったことと自分がバルチック艦隊を見た（正確には幻の艦隊）時と合致することなど（後述）、言ってみれば「信じ込んで」しまったのであるが、鎮魂帰神をくりかえしていたとき、何を思ったのか、突然東京の地震予知をしてしまう。・・・当然ながらはずれてしまう。・・・このとき、大本側で表面にでていたのは浅野和三郎で元海軍英語局の教官で、当時のエリートである。・・・王仁三郎は、のちに日本最大の予言者と呼ばれるようになったが、このときすでに「呑み込みが早過ぎると言うのも危険やのう。あの人は生まれ赤子の心になりきれれるかな」とやや突き放した心境を語っている。

秋山真之は、かみそりのような頭脳の持ち主だから、しばらくはよくても、いつの間にか、他人が馬鹿にみえて自分の方が偉くなってしまう傾向が、というより悪癖あるいは錯覚のようなものだが、そういうところがある。だからいくつかの宗教を経験してきている。

大本教には大正時代に、秋山の参綾前後、海軍軍人の入信が相次いだ。王仁三郎は予言詩ですでに次の戦争の相手になるのはアメリカだと断定していたが、ようやく彼らも気づいた。（アメリカ側は、日露戦争の翌年にオレンジ・プランを発足させており、つまりは対日戦争の準備である。また、参綾というのは、綾部に大本の神殿があったから、綾部に参ることを参綾という。）

浅野和三郎は、大正10年の大本教弾圧を機に大本を去る。心霊研究に没頭し、すでに述べた（ノストラダムスの大予言2）山形県の長南年恵の記録を残したのが浅野である。

結局、秋山真之は、大本と袂を別った翌年、持病であった虫垂炎が悪化し、腹膜炎で亡

くなった。この間、大本に抗議・罵倒の手紙を何通もだしたが、友人たちが、大本は邪教で秋山はそれに誑かされたのだ、とわめく。しかしながら、秋山の家に行くと、稲荷大社の祠と大本の神の両方が祭られてあったというから、第三者の宗教家は、どちらかの神様を戻すべきであった、と語っている。

大本側の資料では、大本教の主神は、「良（ウシトラ）の金神」つまり「鬼門の神様」である。《「大本教」については、別に書く予定ですが、世の立替え立直しを標榜し、様々の邪神がとくに金毛九尾の狐とか、自分たちの放埒を咎められることを嫌って、邪魔をしにくる。悪魔のさやる世の中だから誰にでも話すわけにはいかんのだ、と家族でも信用しない……神話のような話だが、そこは宗教である。》

（大本側が）のちになって気づくのだが、大本には、元皇族がいたり、秋山真之のような頭が切れ、かつ社会的にも高名で政府関係者にも顔が利く人間が大本側についたら、つまり「正神」の側についたら厄介なことになる。そこで邪神たちが秋山夫妻を病に陥れ、誑かし、……離反させようと深謀遠慮で企んだ、と解説している。だから、大本では秋山が予言した地震の日には、徹夜で「大難は小難に、小難は無難に」と祈っていた。この日6月26日サモアでM8.7の地震が発生しているのだが、世界中どこかでいつでも大きな地震は発生している。この場合は、東京が対象なのだから、どのようにいい方に解釈しても、はずれたというべきだろう。実際には、その6年後に関東大震災が発生するが、（註：王仁三郎は大正12年の東京地震をその年に予言している。）大本では、一代の俊傑秋山真之が亡くなったあと、王仁三郎が喪主になって丁重に菩提を弔っている。（予言者と称する者の中には、13.17.19.など10くらいの日を挙げて、このうちどれかが危ない、などと言い、あとから当たった当たったと騒ぐものも数多くいるが、それくらいなら、オレでも言える。）

秋山真之の神霊体験は、日露戦争中に少なくとも2回ある。ひとつは、ウラジオストック艦隊が出没して日本側に打撃を与えている。これを追うのが、上村彦之丞長官率いる第二艦隊で、常に逃げられ続けた。議会でも、濃霧のために敵を逸したと報告すると、「濃霧、濃霧。逆さに読めば無能なり」とまでいわれた。このウラジオ艦隊と旅順艦隊とを個別に撃滅しておかないと、はるばるやってくるバルチック艦隊と合流されると、日本側は不利になる。秋山所属の第一艦隊は、旅順港に籠って出てこない旅順艦隊に釘付けにされている。無電でウラジオ艦隊が出没しているのを聞いても動くわけにはいかない。……「夜もすがら考え脳漿をしばりつくした末、力つきてふとまどろんだ——瞬間、閉じたはずの瞼の裏が陽光がさしたように明るくなり、海がひらけ、入り組んだ陸地が見えだしたのだ。日本の東海岸の全景だ。その向こうに映ずるのは津軽海峡。と、蟻のような三つの黒点があらわれ、次第に大きくくっきりと形をあらわす。夢寐にも忘れ難いウラジオ艦隊ロシア、ルーリック、グロムボイの三艦ではないか。波濤をけたて、三艦は津軽海峡めざして北進する。

——あつ、あいつら東海岸を回って津軽へ抜けるのか。

直覚したと同時に、何もかも霞の奥に閉ざされていた。夢と言えど夢、幻と言えど幻、

これが悪夢かとしばしまどう。明け方であった。ひれ伏して東雲の空を拝した。魂のおのくような感動に顔中涙となった。——神助だ。神はおわす。それは揺るぎない信念となって、秋山の腹の底へ納まっていた。」

夢で見た、などと報告したら、笑われるどころではない。理性の判断として軍令部に報告したが、容れられず、結局逃がしてしまった。このとき、秋山の進言を容れていたなら、蔚山沖海戦で撃沈するまで、幾多の被害はなかつたらう。

秋山の霊的体験はもうひとつある。日本海海戦のとき。すべての作戦は、いつに秋山の頭脳に託されていた。「……敵の進路の想定が重大問題で、……—その責任の重さに押しつぶされそうになりながら、着のみ着のまま昼も夜も寝食を忘れて考え続けました。……忘れもせぬ五月二十四日の明け方でした。ぼくは疲労でよろめきながら士官室に行き、安楽椅子にぶっ倒れました。他の連中はとうに寝てしまって、士官室にいるのはぼくだけです。体はどんなにまいっても、頭脳だけは別のように考え続けていて安まらない。それでも、とろりと眠ったのだろうか、例の臉の裏が明るく深く、果てしなく広がりだした。臉の色が変わって海の青いうねり、波の白がはっきり見える。——対馬だ。対馬海峡の全景が見える。ぼくは無意識に心眼を凝らして、海上をさぐった。いや探るまでもなかった。バルチック艦隊は二列になってのこのこ対馬沖をやってくるんだ。その陣容、艦数までとっさにつかんで、しめた、と思ったとたん、はっと正気に返った。頭は冴えに冴えています。今度は二度目なので、すぐに神の啓示だと感じました。(中略)二十七日の夜明けになって、信濃丸からの無線電信で敵の接近を知り、ついにあの歴史的な海戦になるのですが、その時は肚の底から勝利の確信がありました。なぜって、目前に現れた敵の艦形が、三日前に霊夢で見せられたのと寸分の相違もなかったんですからね。ただ予想に反して敵艦隊の海峡通過が昼になったので昼夜が入れかわり、第一段の艦隊決戦ですで大勢を決したので、実際には第三段作戦で終わりましたが、……いざ戦報を書こうとして筆を執った時、『天佑と神助とによりて……』とまず書き出していたのです。事実、そうなので、決しておまけでも形容でもなかったのですよ。」

これに対し王仁三郎が、「不思議な暗合ですなあ。ここの教祖(註;出口なお)は、明治三十八年の五月十五日から十日間、舞鶴沖の孤島沓島で日本の戦勝を祈願しなはった。二十三日の夜には竜宮の乙姫さんが現れて、『日本を攻める外国の船がたくさん参ったから、これからお手伝いに参る』と言いなはったそうや。あなたの霊夢は、その明け方、教祖はこの日、『もう日本は大丈夫、私の御用も終わったから明日は船を呼んで帰ってもよい』とついて行った若い者に言っています。日本海海戦の勝敗は、この時点で決まっていたかも知れまへんなあ。」

その後いくつか神霊現象についての質問をするが、さすがに壺を心得たものであったという。秋山は、「神霊のお働きの根源」をつかもうとして、いろんな宗教に凝って天然社などにも出入りしたが、「どこに行ってみても、半年か一年たつうちに、自分の方が偉く思われてくるんですよ」

秋山の長所も短所も実にこの一語のうちにあらわれている、と浅野は思った。……あまりその頭脳が鋭敏なのに任せて、八人芸を演じたがるところがある……云々。秋山に憑依した神がいかなるものか、ついにわからなかったが、結局、秋山は大本とも喧嘩別れしたようになり、半年後に腹膜炎で死亡する。

このあたりが、高嶋吞象がいう、「秋山さんは晩年道をあやまるでしょう」という意味である。

秋山に憑依したのは、大本側では強力な邪神であると審神（さにわ）したが、秋山はそれを不服とし、さらには夫人までもが発動（神がかり）し、秋山がうろたえる場面もあった。

秋山が地震の予知をし、その予言した日の2日前のなおの筆先（自動書記）に「……吾ほどの者は無きように思うて慢心をいたすと、悪の守護神に悩められて、この大本の誠の教えが逆さまに悪のやり方に見えて、大きな間違いができるぞよ。」と表現される。王仁三郎は次々と電報を打ち、「予言を取り消し、即刻綾部に引き揚げよ」といい、さらに新たな幹部を急派したが、結局撤回するわけもなく、地震も起こらなかった。

秋山は、「……ぼくが大本を信じたからこそ、天言通を得て、でたらめの予言をしたのではないか。」もし地震が起きればそれを宣伝材料にするつもりだったのだろう、と舌鋒は鋭い。

さらには、「ぼくを邪霊つきのような言い方は失敬じゃないか。あなたがたこそ、邪霊をこの秋山家に運び込んだのだ」

大正7年2月4日、秋山は逝去する。新聞の伝える趣味の項には、「絵画（特に鯉の水彩画）、禅、神道、法華経、人相、古神道等を研究」とある。

（東京から帰ってきた3人の幹部のうち1人が、教祖なおに向かって大声で）「教祖様、あなたが、いまに地震雷火の雨が降るぞよ、なんて筆先書かれるもんだから、わしらはそれを信じて『今に見とれよ、大地震があるぞ』と言って東京で宣伝してきたんですよ。けれどさっぱり地震も火の雨も降りません。教祖様どうなってるんです！わしらが困っているのに、あなたは何しとられたのです。？」とわめいた。

なおは、銀鈴を転がすように面白そうに笑い出した。「○○さん、あんたらが人にそう言うたさかいいうて、神さまがすぐそうはなされしまへんわいな。あんた、まだ神さまを使うてん気ですかい」「いやー、どうも。」とさすがの大男も体を子供のように縮めてなおの前にかしこまった。……ぐうの音もでない状態である。

秋山が予言した事柄について筆先にすぐにくるといのは、いったい、どのような情報が伝わっているのだろう。

ずっと読んでいると、どうも秋山の分が悪い感じをうける。大本は、大正10年と昭和10年の二度にわたって国家による弾圧を受けた。その後、離れていった浅野や谷口雅春(生

長の家)、世界救世教、天行教など多くの宗教指導者が生まれた。二度目の弾圧では、あまりの拷問のために精神異常を来たした者や自殺した者まででたが、転向したものがほとんどいなかった、という。

2013.05.30.